

スタア小説

チャンピオン 鶴田浩二物語

花田進介

なにくそ！ 俺だっていゝ役者になってみせる……と、  
浩二は映画「酔いどれ天使」をみて、堅い堅い決意をした……！

楽屋での回想

「お兄いちゃん。大変、大変よ」ひばりちゃんが、十二畳もあるこの大劇の楽屋に駆け込んで来た。「お兄いちゃん！」と呼ばれて、浩二はいつものように気軽に、

「何がさ、ひばりちゃん……」と、大好きなひばりちゃんを迎えた。

「大変だ、大変だって、本当に何が大変なんだい……？」云われて、天才児童といわれる美空ひばりちゃんはいよいよ顔を緊き締めて

「だって、切符が買えないで表に立っている人が何百人って居るのよ。徹夜組もいるんですってさ……」と、大きな感動をフーと吐く息と共に出している。

「ほう。そいつあ大変だね。だけど、それはひばりちゃんの人気が強からだよ」

「あら、そうじゃないわよ。お兄いちゃんの人気よ」

浩二とひばりは、今日も大劇の楽屋で、逢うそうそうに楽しいもめごとをしていた。鶴田浩二と美空ひばり。ふたりは、大の仲良しとして知られる人気映画スタアと豆歌手で、今日はその評判を裏づけるかのように、こゝ大阪劇場の舞台上で実演をつづけることになっていた。

今日がその初日——。浩二にとっては、久し振りの舞台上、いや久し振りというよりは、映画の鶴田浩二として売り出してから初めてとあってよい実演であった。

「どう、大劇に出てくれんか……」初めこの大劇出演をすゝめられた時には歌を唄うという条件なのでなんだか照れ臭いものを感じて、

「うん。だけど、どうも……。歌といってもまだ素人みたいだし……」と渋っていたが、ひばりちゃんと共演と打ち明けられて

「じゃあ、これ一度だけ……。ひばりちゃんのためならお手伝ひをしましょう——」

気持よく、いやむしろ進んで承諾した浩二だった。そして、その初日の蓋をあけてみると、大変な人気である。大劇始まって以来とあってよいファンの殺到ぶりで、先刻も表方の人がやって来て

「えらいこっちゃ。夜中から列を作ってまっしや……浩ちゃんもひばりちゃんも、たいした出世やなあ——」と、云われた許(ばか)りである。「大変よ、大変よ——」と、ひばりちゃんが云うのも無理はない。人気者でファンの殺到には慣れているひばりちゃんが、この大劇での人気には、全くその素晴らしい位のファンの熱狂にびっくりするような大当りであった。

「ねえ、お兄いちゃん。うんと頑張りましょうね……」ひばりちゃんがそう云って、浩二の手を握り、一、二、三と両手を振った。ひばりちゃんは浩二によくそうする。浩二は廿九歳、ひばりちゃんは十六歳、共に前途は洋々の、このふたりの楽屋は、ふたりの若さだけでも青春の気が満ち満ちていた。

「さあ、さ、ひばりちゃん、お化粧だよ、顔を作ろう作ろう。商売商売……」 「はい」  
もうそろそろ出番が近づいている。ひばりちゃんを性急(せき)たてゝ、浩二も鏡台に向って坐り直した。顔を舞台向きにメーキャップするといっても、男の浩二には、そんなに手間取らない。色は白い方だし、眉毛は濃く太いし、眼は大つぶらな方でパツとしているし、そのまゝ衣裳をつければ舞台に出られるほどだった。

だから、浩二は化粧前に坐ると、いつもたゞ鏡と睨めっこをするのが習慣になっていた。が、今日の化粧前は撮影所の部屋とはちがう、化粧前と云っても普通の鏡台が並んでいる撮彩所の簡単なそれとはちがって、横に広いデンと落ちついた本格的な化粧前が劇場の楽屋にはある。そして撮影所の楽屋とはちがう匂ひがある。その匂ひは何処から出てくるのだろうか。浩二は、久し振りに坐ってみた劇場の楽屋に瞳を流した。

たいていの劇場の楽屋がそうであるように、この大劇の楽屋も白い壁で囲まれている。幾十人、幾百人の芸能人が出入りしたことであろうこの楽屋は、他の劇場の楽屋もそうであるように壁と化粧前と裸電球だけが特色で殺風景だ。浩二の感ずる“匂ひ”というのはそこにあつた。表は賑々しく派手な装いにつゝまれて、拍手と顔、顔、顔に見詰められる芸能人の生活だが、一步ステージを下りて楽屋に戻ると、そこにはこうした裏悲しい裸の現実が冷えびえと待っている。劇場の楽屋の悲哀といおうか……。

「ずいぶん、昔だったなあ——」と、久し振りに嗅いだ劇場の楽屋の匂ひにふれて浩二は思わず、高田浩吉先生のことを思い浮べていた。松竹の鶴田浩二——って、いったい本当に自分なのだろうか。このわれ返るような人気は、真(ほん)なものなのだが、人気って怖いみたいなものだ。一人前の役者になろうなろうと努力して、今日この日の人気にぶつかっている今、浩二はむしろ遠い遠い昔のまだ下っ端だった頃の自分が懐かしく思い出されてくるのであつた。

## 感激したチャンピオン

鶴田浩二は、本名を小野と云って、浜松市の寺島町という町に生れた。浜松造幣所の工務課長をしていた小野忠次を父に持ち母きみえとの間にもうひとり幸生という弟が居る。この幸生は今年十二歳になった。浩二は、廿六歳である。小学校を卒業する十四歳まで、浜松に育った浩二には、いま日本映画界の彗星としてこの間フランスに旅立った異才木下恵介監督を生んだこの町については、色んな思い出が秘められていた。

「十四歳といえば、そうだ、僕が高田浩吉先生の所へ弟子入りをした年ではないか……」  
小さい時からスポーツが好きだった浩二はまた同じ位に映画が好きだった。だから、父が大阪に転勤して、彼が大阪の此花商業時代には、よくピンポン大会などでは優勝杯を貰ったものだ。その頃だった、当時の時代劇スタアとして、人気の絶頂であった高田浩吉の許に弟子入りをしたのは……。

「江戸の柳は、風まかせ  
好きなあの娘は、口まかせ……  
えゝ、しょんがいな、  
あゝ、しょんがいな、……」

美声であり、顔も江戸前にキラゝとした高田浩吉は、林長二郎（今の長谷川一夫）と人気を頷ち合うほどの売れっ奴だった。高田浩吉が、レコードにも吹き込み、映画の主題歌としてスクリーンの中で、縦横無盡に歌いまくったこの頃の或る日、浩二は知人に伴われて松竹京都下賀茂撮影所に浩吉を訪れた。

この時、浩二ははじめて楽屋というものを見た。

「僕、小野です。先生どうかよろしくお願ひいたします……」化粧前に、荒い格子縞の部屋着を纏って顔に白粉（おしろい）をぬっていた浩吉は、チラリと浩二をいちべつすると、また忙しく鏡台に向き刷毛を動かしながら云った……。

「役者って、大変ですよ。十年や二十年は下積みで辛抱しなければならない人もありますしね。下手をするとそのまゝ下積みで一生を棒に振らなければならないこともある……」だが、浩吉はそう云ひながらも、何処か愛くるしい鶴田を見て、

「これは、ものになるかも知れない——」と、ふと考えた。

「一生懸命に演ってみます」浩二は、この浩吉の考えを突き破るようにはっきりと決意のほどを示す力強い声で云った。

それから、浩二の役者生活が始った。役者といっても、その他大勢組みのひとりである。寒い冬の日、「やあ、やあ——」と云って十手捕り縄を持って、カメラの前で先生の浩吉に斬られる役、ひどい時には、ロケーションで橋の上から河の中に飛び込むこともあった、しかし、「何時かは、きっと先生みたいになって見せる」辛（つ）らいことの多い役者生活であったが浩二の胸を去来するものは、何時かはという希望だった。

だが、人生は限りなく無情であった。人生到る処に青山あり——という諺もあるが、これはそれだけ困難が多いということの、ひとつの逆説ではないだらうか。あれほど全盛の人気をあほった高田浩吉も、あの忌まわしい戦争のボツ発によって、世の中一般の不景気がたゞり、映画界を去った、地方巡演をする日が多くなって行つた。高田浩吉劇団がそれだった。

この頃、浩二の身边にも変化が起きた。偉い役者になるには、もっと勉強をしなければいけない、教養を身につけなければならないという友人の勧告もあって、劇団を止め、関西大学に入学を決意したのである。浩吉も

「それはいいゝ。若いのだし、それに時世も今は余りよくない。役者をしていても仕方のない悪い時代だから、また折があつたらやっ来て給へ……」

師のすゝめもあって、役者生活の足を洗った。時に、浩二が十九歳の年であった。

「あゝ、あんなこともあつたっけ……」浩二は、楽屋でふと回想から目覚めた。出演のベルが、激しく鳴っていた。

美しき感動の日

場内はシーンとしていた。薄暗い客席に、ひと筋ほのかな青白い光線がぐっと前方に延びて行って、その彼方にスクリーンが写し出されていた。東京のモダンな日比谷映画劇場の一番後ろの席で浩二は先刻(さっき)から喰ひ入るように画面を見ていた。

映画はアメリカ映画の「チャンピオン」であった。話は、或る若い拳闘選手がチャンピオンになるまでの物語りで、成功を夢みて、成功を勝ち得るために手段を選ばず利用出来るものを片っ端から利用してゆく。中には資本家の妻も居た、コーヒ店の娘も居た、そして何人かの女性を利用して、つひに栄冠をかく得するが、最後に無理がたたってリンクで死ぬ——という映画だった。主役の男優カーク・ダグラスが素晴らしかった。拳闘選手にふさわしい逞くましい肉体をしているのが、彼の役を大変に助けてはいたが、そればかりではない、彼の演技も力強かった。「うーむ……」浩二は観終わって、言葉が出なかった。連れが居るのも忘れて、ふらふらと夜の銀座の人の波について歩いて行った。

「おいおい、浩ちゃん、どうしたんだい。全くひどいなァ、俺も一緒に来たんだぜ！」大船宣伝部の竹中という若い二枚目が、後から追っかけて来た。

「あ、済まん、済まん。余りいゝ映画なのでつい……」

「つい、は、いゝけど。しかし、全くいゝ映画だったね」

浩二が同じ俳優であるために、よい映画を終ったあとに感動はいつも凄かった。喫茶店に落ちついてからも、浩二は「チャンピオン」に取りつかれていた。

「あんな映画が撮りたいよ」

「うん、浩ちゃんにぴったりだな。」

「おれは、あゝいうのを見ると泣けて、泣けてしようがない——。ほら、君にも話したっけね。俺が、高田先生の劇団を止めて、それからまた終戦直後、先生の所に戻ったことを——」

「うん。うん——。あれは浜松だったね。浩ちゃんが復員して帰省していた所へ、高田さんの劇団が来演した話だろう」

「小野君、君は役者になれ！ 懐かしいので楽屋を訪れたら、先生がそういつてすゝめてくれた。それで俺もまた役者になっちゃった……」 その時、浩二は高田浩吉の浩を貰って鶴田浩二と名前が出来たのだった。

「俺はね、実を云うと、あの「チャンピオン」を見ていると、三船敏郎君の「酔いどれ天使」を思ひ出すんだよ。忘れもしない先生に従いて、「呉」に巡業した時だよ。町を歩いていたら小さな映画館があった。ポスターを見ると「酔いどれ天使」、三船敏郎主演と書いてあるんだな。題名からしてよかったな、今考えても——。」

「ほう。それりゃあ、いったいどういうことなんだい？」

「まあ聞け。それで俺はその映画館に入ったんだよ。そして「酔いどれ天使」を見たんだな。三船敏郎なんて聞いたこともない名前だった。あの頃は……。そいつがよ、これはまた素晴らしいんじゃないか。君も見たら、あの映画。凄いヴォリュームがあるんだなあ。いまの「チャンピオン」と同じ感動を受けたんだ。俺は早速、先生の所へ馳け戻ったんだよ——」

「如何してサ」

「先生の部屋に入った。そして、たゞ両手をついて云ったんだ。『先生、僕を映画にやって下さい。——僕は映画俳優になりたいと思います。撮影所を紹介して頂けませんでしょうか——』すると、先生が偉い。しばらく、じっと何かを考えていられたが『いゝだらう。その代り、いゝ俳優になれよ！』——」

「そうかい、そういうことがあったの……」

「うん。「酔ひどれ天使」が僕を映画界に入れさせたと云ってもいゝだらうな。それまでに聞いたこともない役者が、あんなに上手くやってるんだものね。なにくそ、俺だって——という気持だよ、そして、松竹京都に入れて貰ったんだ。大曾根辰夫監督が先生の知己だったし、大曾根さんがよく世話を下さった……だからね、チャンピオンみたいのを見ると、「酔ひどれ天使」の力強さを思い出すし、あゝいう役を演りたくなるんだよ」

浩二は、いつ気にそう云って、ホッと溜息をついた。竹中もそういった鶴田の一本気な所をよく見ることもあるが、そんな時の浩二の瞳は美しく濡れ、光り輝いていて、いつも「美しいなあ——」と思う。宣伝部員とスタア、生活は異なっているけど、ふたりは評判の親友であった。

### 輝く希望の夢

「浩ちゃん、今日忘れないでよ、夜、撮影が終わったら雑誌社の座談会があるからね」

「うん。時に、今夜の話は何んだっけ？」

「青春座談会だっけ——」

「ほ。そいつあ、恐れ入った。ぢゃあ、ひとつ、大いに怪気焰を吐くとするか！」

鶴田浩二——。彼は、こういった元気な口調をよく吐き出す青年である。街を歩く姿も若々しきで満ちている。頭髪もピタリとポマードをつけて、ピカピカと光らせることはしない。ぱさりとした髪の毛を無造作にかき分けている。両手も、これまた無造作にポケットに突込んで歩く。一見してスポーツマンといった感じ、だが、スポーツマンにしては色が白く、どこか瀟洒な感じがするので、やはりそこだけが映画スタアを表徴しているといったらいゝだろう。

「もう少し、済ませよ。お前は役者なんだぜ……」そう、親友の竹中が云う時もある位、彼はさっぱりとし過ぎる位いの気性でもある。だが、冬も間近になって秋風が吹き、やがて白いものがちらりほらりと降りる季節にもなれば、人は皆んな小さくちぢこまり、オーバーの襟を立てるように、浩二もまた、タフな反面にそういった例にもよく似た人間の持つ悩みも多いようだ。

昭和廿六年の初めだった。某日刊紙をはじめ、各雑誌が年の初めに行う催しがある。スタア人気投票の行事がそれだった。その年、鶴田浩二の人気は、じつに素晴らしかった。第五位以内に入ることは勿論、某紙、某誌では既成の大スタア圧して、第一位の榮譽をかく得している。「もう、鶴田浩二時代だな……」という評判さえ、映画界の内部でも噂されるほどだった。

十月の或る日のことだった。竹中と浩二は、銀座でビールを明けていた。「おい、竹さん！」竹中は、竹さんと呼ばれて、「うん？ まだ飲むのかい」

「いや、そうじゃない。俺は今後どうしたらいいかな——、役者として、何をどうすべきか——いま一番危険な時だろうな。運勢からいったら一番いいのが今日だ、だが人間いゝ時によく反省すべきだと思うしね。となると俺は考えるよ——」 いつにない真剣な表情の浩二だった。

「だって、お前、行く路は決まってるじゃないか——」

「うん。役者として、俺は長谷川一夫さんを尊敬しているしな、役者として、俺はああなりたい。それはよく分っているし、今後も長谷川さんを目標にするだろう。だがね、もうひとり魅力にひかれる人がいるんだよ。宇野重吉、佐分利の信さんだ。もちろん、鶴田は鶴田で、全然別な人間さ。だが、将来の方向、役者としてさ。そんなものを決めておかないと、俺は今日の俺に自信が持てない——昨日、映画に入ったと思ったら、もう早いものだよ。四年経つんだぜ。」

「そうだな。考えれば早い、もう何んだろう。廿七本位い、写真を撮っているだろう？」

「うん。ちょどその位いだ……」 時には、そんな話で自分をひとり分析する浩二だった。

二十六年を迎えれば、廿七歳の春である。若い。二枚目である。人気は高調の時である。そして独身でもある。その上にもうひとつ、歌が唄えるというので、コロンビアの専属歌手としての新しい道も拓けている。浩二は、もう五、六本もビールを明けただろうか、白い頬にほんのりと紅をさしたようになっていた。

「浩ちゃん。いつもその位いにしておけよ。とっっても美しいぜ、男がいうとキザで変だが、お前は大丈夫。なにも考えずに、写真を撮れよ。しばいが上手くなれよ。前途は洋々なもの……そうしたら、いつか結婚するさ、好きな人でも見つけてさ……」 竹中は、そう云って、酔った顔を破笑した。

「結婚——？」好きな人をと云われて、浩二は、いままで忙しすぎた故いもあって、そんな問題について一度も考えたことがなかったので、びっくりした。

「そうだ、人生にはそんな問題もあったっけ……。」 突然、云われたために、浩二は、なんだか胸をつき上げて来るお可笑さに襲われ、思わず「ハハハ……」と笑っていた。

その笑ひは、健康であり、なんの屈託もない快ろよい響を持っていた。それは、そして力強く、映画のチャンピオンにも等しい人気絶頂の浩二らしい笑いだった。